

縄文時代後期前葉の集落における墓域について

—周辺地域の事例調査—

石川智紀

はじめに

新潟県村上市猿沢・檜原に所在する上野遺跡は、縄文時代後期前葉の大規模集落である。三面川の支流である高根川右岸に立地し、標高は約35～39mである。2024年度までに本発掘調査が第8次調査まで行われ、その内の第3～6次調査に携わる機会を得た。第4次調査以降に居住域の調査が本格化し、また類例の少ない焼人骨集積土坑が検出されたことで、たびたび墓域の存在の有無および位置について議題となつた。焼人骨集積土坑のような特殊な埋葬方法は別としても、いわゆる埋設土器（埋甕）と呼称できる遺構がいくつか検出されているが、密集範囲は認められていない。現在、個別遺構の再検証が行われ、その後に埋設土器の分類基準、集落内における位置関係等が把握されてくるものと思われる。

第8次調査までに上野遺跡で明確に墓と呼称できるものは合葬墓（焼人骨集積土坑）1基のみで、単基であることから墓域とは言えず、また祭祀遺物も共伴していない。墓域の有無及び特徴を明確にすることを目的に、縄文時代後期前葉を主体とした周辺遺跡との比較を行うことにした。

検討方法と資料調査

まずは墓域としての認定条件（①墓の種別、②墓の数、③墓の相互位置・範囲、④居住域との差異、⑤居住域との位置関係）がどのようなものかを明らかにし、土偶・石棒等の祭祀遺物と呼ばれるものとの相互関係（①遺物種別、②遺物の系統、③破損状況、④出土位置（墓の内外、墓域の内外）、⑤遺物量等）を検討する。

令和6年度の資料調査として、福島県喜多方市藤権現遺跡の調査所見の聴取と、出土遺物を実見することにした。令和7年1月28・29日に実施した。藤権現遺跡は総合的な報告書が未刊ではあるが、大規模な墓域があると報じられた遺跡であり、その墓域と比較することで、墓の条件に合う遺構があるのかどうか、埋設土器の分布状況や居住域との位置関係で、墓域として認定できるのかを考えたい。

藤権現遺跡の概要

調査継続中のため、既刊報告書及び現地説明会資料で公表されている範囲で記述する。

遺跡は喜多方市東部の塩川地区に所在し、雄国山の西側麓に位置する。第2次（令和2年度）調査で、縄文時代後期初頭～中葉の土器埋設遺構や配石遺構のほか、土偶や腕輪などの祭祀遺物が多数発見された。縄文時代後期前葉を主体とした大規模な墓域として注目され、調査途上であったが遺跡の重要性から、事業計画を変更して保存となった。第3次（令和3年度）調査以降は、保存・活用を目的としたトレンチ調査を継続的に実施している。埋設土器の土器型式は、上層が加曾利B式及び宝ヶ峰式とそれに類するもの、下層が綱取式・三十稻場式を中心に分布する傾向にある。

図は遺跡保存の契機となった、第2次調査の9区（3,391m²）の調査範囲である。「令和6年度 藤権現遺跡現地説明会資料」（令和6年10月19日開催）から転載した。

前述した認定条件①（墓の種別）・②（墓の数）は、「配石遺構」約100基（礫の不規則配置含む）と「土器埋設遺構」約100基あり、土器埋設遺構は「正立」・「倒立」・「横置き」が認められるが、横置きの場合

は、遺物包含層内の一括出土で取り上げた可能性があるとのことであった。粗製土器が多いので詳細時期が判別しにくいものが多く、またサイズに統一感は無い。底部穿孔及び体部下半側面穿孔のものも認められる。配石遺構は内外に骨片・焼骨が散在するが、土器埋設遺構で骨が伴う例は無い。土壌分析では、リン・カルシウム分が高い個体があるとのことであった。土器埋設遺構の中で、炉を含む可能性を聞いたが、焼土・炭がほぼ伴わないことから低いとのことである。また被熱礫の存在については、火山による被熱礫（雄国山の安山岩）があるので、現地で生成された被熱痕跡か判別しにくいようである。条件③（墓の相互位置・範囲）は、図に示されるように近接して存在しているが、この調査範囲では大きく2つのエリアに分けることが可能とのこと。また調査区壁面でも土器埋設遺構を確認していることから、さらに広範囲に墓域が及んでいる。条件④（居住域との差異）と条件⑤（居住域との位置関係）については、居住域と想定できる範囲が未確定であることから、まだ不明である。

祭祀遺物と呼ばれるものとの相互関係①（遺物種別）については、土偶・腕輪・耳栓・耳形土製品・動物形土製品・土製円盤・三角形土製品・石棒・石製品（岩板または岩偶）などがある。②（遺物の系統）については、現段階で詳細は不明である。③（破損状況）は破片が多いが、完形の耳栓2点が同一遺構（S282）から近接して出土している。④（出土位置）については、土器埋設遺構が集中する2つのエリアと重複して出土する例が多いとのことである。⑤（遺物量等）についてであるが、現在までに土偶は約90点、腕輪は約30点（破片数）出土している。9区（3,391m²）の約4分の1が古墳時代の流路で削平され、また遺物包含層の半分近くが未調査で残っている状況を勘案すれば、十分多いと思われる。また廃棄エリアと想定している南西部では少ない傾向にある。石器・石製品の内、石鎌・磨製石斧・打製石斧類が少ないので居住域とは異なる状況が考えられるそうだが、居住域が中心と考えられる上野遺跡でも同様の傾向を示している。

小結

喜多方市教育委員会のご厚意により、第2次調査当時から現在までの所見を聴取することができ、また報告書刊行前の遺物を実見することができた。今後も相互に情報を共有し、上野遺跡の現地調査及び整理作業に反映できるようにしたい。

